

**日本の若年女性における子宮頸がんリスクの増加：
1985年から2012年の日本、韓国、日系アメリカ人の罹患率の推移の比較**

子宮頸がん（子宮の入口のがん）の罹患率（がん^{りかん}と診断される率のこと）は、多くの先進国では減少しているにも関わらず、日本では1990年代後半から増加していることが知られています。今回の研究では、日本人、韓国人、日系アメリカ人の女性について、1985年から2012年の子宮頸がんの罹患率の推移を、年齢、時代、世代別に比較しました。

調査の結果、日本人女性全体で子宮頸がんの罹患率が増加し、日系アメリカ人や韓国人女性よりも高いことが分かりました。これは、日本人女性の若い世代での子宮頸がんのリスク（がんになる可能性）の増加に起因しており、そういった傾向は日系アメリカ人と韓国人女性では見られないことが判明しました。日本でのリスクが高いのは、主にヒトパピローマウイルス*の感染が原因と考えられます。

* ヒトパピローマウイルス

性経験のある女性であれば、たくさんの人が生涯で一度は感染するとされている一般的なウイルスです。このウイルスは、子宮頸がん、肛門がん、膣がんなど多くの病気の発生に関わっていることが分かっています。感染はワクチン接種で予防できます。子宮頸がんは、検診すれば早期で発見することができます。

本資料は、専門家でない方向けに出来るだけわかりやすく解説することを最優先しています。そのため専門的な内容は割愛しており、論文内容を完全に再現しているものではありません。より詳しい内容は出版社の論文をご覧ください。